

発表要旨

連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

本シンポジウムの趣旨

連続シンポジウム発起人 鶴嶋 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各自の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 17

コールドウェルの「苺の季節」を読む—教室で読む英文学—

奥井 裕

本シンポジウムの前々回の発表（第10回年次大会、2018年9月2日）では、まず始めに語学の授業で文学作品（主に小説）を講読することの有用性について述べ、次にその根拠として、語学的側面を中心とした授業報告を行ったが、今回は作品解説の方に重点を置く。というのは、文学作品を講読する場合、時にはその素晴らしさを実感出来るような解説が必要になることもあるからだ。そこで今回の発表では、成否はともかく、そこに重点を置いた授業報告をしてみたい。取り上げるのは、アースキン・コールドウェル(Erskine Caldwell, 1903-87)の「苺の季節」("The Strawberry Season," 1930)で、この作品は、以前は高校の検定教科書でも非常によく使われたものだった。「苺」＝「思春期」の関係を解き明かすことが出来ればと思っている。

発題者 18

仮定法の帰結節に現れる should について

野村忠央

本年、復刊された奥井（2021）の最終章「ワークとレーバー（あとがきに代えて）」の中に以下の英文がある。

- (1) The antithesis to labor is play. When we play a game, we enjoy what we are doing, otherwise we should not play it, but it is a purely private activity; society could not care

less whether we play it or not. (奥井 2021: 176-177、下線筆者)

この（1）は有名な英語頻出長文の一つであるが、その奥井訳は（2）であるのに対し、ある問題集の解答・解説（日本語訳）では（3）のように記されている。

（2） そうでなければ、私たちはゲームをやりはしないであろう。

（3） そうでなければ、それをすべきではない。

本発表の目的は上記の日本語訳を糸口として、仮定法の初習段階で学ぶ、下記（4）の公式の should の理解が生徒、教員、出版社の長文問題集の解答で誤っていることがしばしばあることを喚起することである。

（4） If S1 + 過去形/were～、S2 + {would, should, could, might} + 動詞の原形～.

（本発表は学会懇親による連続シンポジウムの発表ということで、筆者の同名論文（野村（2022、近刊）に基づく発表であることを予めご了承頂ければと存じます。）

発題者 19

特別講演 どうしたら高い学習意欲を持ち続けられるのか?

渋 谷 和 郎

優れた教材を用い、優れた授業を展開し、生徒や学生の学力を高めることが教師の役割であることは言うまでもありません。それと同時に、彼らの学習意欲を高め、育てることも教師の大切な役目と言えるかもしれません。なぜなら、どんなに優れた教材や授業も、やる気のない（聞く耳を持たない）学習者にとっては、「馬の耳に念仏」になってしまうからです。そういう意味で、「動機づけ」は教授や学習を成立させるための前提条件と言えるかもしれません。

動機づけ（モチベーション）は、外国語学習の成否を左右する最も重要な要因のひとつとして、学習開始年齢や外国語学習適性などと共に、第二言語習得（Second Language Acquisition; SLA）研究の中でこれまでに多くの調査・研究が行われてきました。本講演では、モチベーションに関わる大切な理論や概念を概観しつつ、SLA の知見とこれまでの教育経験を元に、「どうしたら高い学習意欲を持ち続けられるのか?」という問い合わせについて、「教師として、また、学習者としてできること」という視点から、皆さんと共に考えてみたいと思います。